

Title	Studies in Early Chinese Culture, by Herrlee Glessner Creel, London, 1938
Sub Title	
Author	松本, 信廣(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1940
Jtitle	史学 Vol.18, No.4 (1940. 4) ,p.220(782)- 221(783)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19400400-0221">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19400400-0221</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

の感化を與へしものである。又日露戰役に際しては命により戎克十二隻を以て海峽を日夜警邏せしめ、糧餉を滿洲に送り勳功多く勳五等に叙せられ、大正三年、多年殖産興業の開發に盡瘁せし功績を以て勅定藍綬褒章を、四年即位の大典に島民の代表として参列、勳四等に、十二年今上陛下東宮として始めて鶴駕を南島に枉げさせられし節、更に島治功勞者として勳三等授けられ、且つ御尊影を拜受した。昭和三年即位の大禮に参列し、九年七月島民として始めて貴族院議員に勅選され、國政翼贊の重責に任じた。時に島民は擧げて皇恩に感激し、祝意を表したと云ふ。十二年秋病を獲て、十二月九日遂に逝去、生前の功績を嘉賞せられて特に從五位を追贈せられた。年七十有二翁、歴代の總督の信頼を得て島治に参劃し産業の興隆に努力し、文教に盡瘁した。又孔教振興の爲め臺北に聖廟の建築を贊同し數萬圓を寄附せしを始め、各方面に多額の金圓を寄附せられた。

余、翁の警咳に接する機會を得ざりしも、本書により翁の内臺共存共榮に終始一貫努力し、國家に貢獻の勳功尠からざりしを知り得たことを悦び、又翁の嗣子辜振甫氏は既に最高學府に業を修め、遺志を承け、遺業を繼がれしを以て増々島治殖産興業に盡力し愈々家名を擧げられむことを切望して本書の紹介を擲筆する。

(昭和十四年十月十六日 武田勝藏)

### Studies in Early Chinese Culture,

by Herlee Glessner Creel, London,

1938

シカゴ大學の支那文學の助教授たるクリール氏の良心的な研究業績である。考古學論叢の中に梅原氏が指摘した如く、氏は最近支那學者の業績に關心を持ち本邦學者の研究には目を通すこと少い。然し支那學者の説の單なる受賣りでは無く、一々之を検討し、極めて注意深く、支那最古歴史文化の真相を發かうとてをる。氏は神話の方面には殆ど觸れず、また在來の歐米學者の所説にも盲從してゐない。先づ殷代史料として甲骨文の研究、殷虛發掘の經過を述べ、殷代の文獻として普通知られてをる詩書中の諸篇を批判し、之が悉く後出のものなることを論じ、結局殷代の研究には殷虛出土物、その中でも甲骨文が最も重要な史料なることを述べ、次いで第二編「夏は存在せるや」の章に於て、夏朝の物語は恐らく周朝が自己の征服行爲を正統化し、殷人を從屬せしめんが爲作爲した政治的宣傳の所産ならんとし、然しその夏朝の存在は全く假空のこととは思はれず、「夏」と云ふ名辭が詩、書、左傳、國語中に於て支那文化を持つ諸國を表はす爲用ひられ居ることに注意し、黄河の下流々域、北東支那に曾つて夏朝の存在せる事を推し、たゞその證據を缺くと論じ、第三篇「商とは如何なる民族なりしか」に於て、商人は盤庚の時分から周朝の興起まで安陽を占めて居り、恐らく石器時代人と同じく廣義の蒙古系種族であり、その文化は石器時代文化の繼續であり、恐らく黑色土器文化に青銅時代の或種の技術の接合せるものなるかも知れずと云ひ、よし青銅技術が外部よりの輸入にしる殷人は之を古今無比の優良製作品を生むまで改善せることを認め、その文化の親縁は之を西方に求むべきよりも寧ろアメリカか太平洋州に求むべきことを論じ、支

那文化の世界無比なる持続性、その外來文化を攝取し之を自國化するの卓越せる技能をたゞへてをる。著者の意見はあまり突飛ならず極めて着實な意見に終始してをる。たゞ氏は日本關係の文獻を無意識か故意に無視してをるので殷文化の太平洋文化との類似を説くにもフエノロサの Epochs of Chinese and Japanese Art や東洋文庫英文紀要第一號に載せられた濱田博士の Engraved Ivory and Pottery, found in the Site of the Yin Capital に述べられた先人の同様の意見などには全く言及されてゐないのはどうかと思はれる。學者は今少し寛容であつて欲しいものである。然し本書は眞面目な勞作なので殷代の研究に當分歐米文籍中首位を占め得る良著であらう。たゞ今後氏が更に進んで一日も早く支那古代文化の精華である周代の研究に入り、完璧を期せられんことを期待して紹介の筆をおく(松本信廣)。

Prehistoric Pottery in China, by  
G. D. Wu (吳金鼎) London, 1938

山東城子崖遺蹟の發掘者たる著者が後中央研究院の殷虛其他の發掘に加はり、次いで英京に留學してイエッツ氏に師事し、支那先史時代の土器を綜合比較研究したるもの本書である。先づ土器發見の小史を述べ、之を北河南グループ(後岡、侯家莊、小屯等)、西河南グループ(仰韶村、秦王寨、池溝寨、不招寨等)、山東グループ(龍山、兩城等)、山西グループ(西陰村、荆村)、陝西グループ(鬲雞臺)、甘肅グループ(半山墓地、馬廠等)、滿洲グループ(沙鍋屯、單砬子、高麗寨)に分けて敘述し、色彩、形式、材料、厚

味、技工、表面、裝飾の七方面から分析し、各地域に於ける編年をうち建て、更にこの七地方群の特色を比較し西河南に於ては先史時代を通じ特色を呈したること、河南と山東に於ては黑色土器以降同じ特色の認められること、南滿洲に於ても或種の特質は黑色土器以降同様なることを述べ、各特質は時代により變化することを結論し、此等の研究を綜合して先史土器を六類に分け、更に土器研究の結果に準據して各遺跡の編年をうち建てんと試みてをる。ロンドン大學の學位論文なので多少讀みづらい點があるが此種の綜合的敘述は從來甚だ缺けてゐたので此點極めて興味多き著述である。たゞもし著者が陶片の化學的分析研究にまではいつてゐたならばもつと得る所多かつたらうと残念に思ふ。また南方に對しては僅かに杭州良渚鎮の遺跡が黑色土器を出だすことが知られてをるに過ぎず題名は「支那に於ける先史土器」とすべきよりも寧ろ「北支那に於ける先史土器」となすべきであつたらう。本書中最も精彩あるは土器製作の方法に對する著者の推定である。たゞし黑色土器の成因を著者は使用による黑色化とみとめるのはあまりに單純過ぎる見方であらう。全體的に支那の考古學の土器研究は今なほ甚だ幼稚な状態にあり、之を急速に綜合し系統づけんとするよりも先づ個々の遺跡出土物の今少し正確な發表及びその集成と云ふ様な出版が望ましいと思ふ。それにつけても事變が支那考古學研究の諸事業を中絶せしめたことは極めて遺憾である(松本信廣)。